

過疎地に暮す身体障害者に対する生態学的探求 : ヘルスプロモーションの観点から

著者	丸山 東人
学位授与年月日	2015-02-18
URL	http://doi.org/10.15083/00009191

論文の内容の要旨

論文題目 過疎地に暮す身体障害者に対する生態学的探求
ヘルスプロモーションの観点から

氏名 丸山東人

【目的】日本の過疎地に暮す身体障害者の生活の現状はどのようなものなのか、また、当事者は生活や障害にどのような意味を持たせて生きているのか、の2点を探求すること。

【背景】2006年に障害者の権利に関する条約が国連で採択されたことを受け、WHOは世界障害報告書を発行した。その中では、障害者の健康情報の収集の促進や、障壁がある地域（農村や過疎地等）に暮す障害者の研究を求めている。一方、日本の僻地や過疎地でも、人口減少が進み、社会基盤がぜい弱で地域医療の危機が生じていることから、農村社会の社会的格差を改善するための疫学調査を強化する必要性が求められている。これまで、諸外国では1980年代中盤、国内では1990年以降中盤より、高齢者対象の疫学研究は多く行われているが、障壁のある地域に暮す障害者対象の研究は殆ど行われていない。

【対象】北関東地方にある、2つの過疎地域自立促進特別措置法指定地域に暮す18歳以上の身体障害者。総計88人（男48人、女40人、両自治体在住の身体障害者の10.4%、平均年齢64.8歳）。そのうち、31人（男19人、女12人、両自治体在住の身体障害者の3.7%、平均年齢67.7歳）と面接した。データは全て合計し、求められる共通の基盤という観点から考察した。

【時期】2008年4月から12月

【方法】 . 生活状況の把握、 . 心の健康状態の把握、 . 語りの分析、を行った。

【結果と考察】

. 当事者と生息の場所との関係性を調べた結果、多くの人は、居住地を暮らしやすい場所と考えており、家族や近隣住民、友人、保健福祉関係者と良好な関係を築き、多様な健康行動を取りながら暮していた。特に、当事者の健康な暮らしを考える上で、人間関係とそのあり方に着眼して

行くことは大変重要であると判断され、地域に根づいた密度濃い人間関係を基盤とした生活模様が、過疎地の暮らしの長所であることが伺えた。主観的健康感を尋ねた結果、全体としては「自分は健康」と答える人が多く、交通便利性に難はあるが、良い医療サービスを受けていた。社会参加に関する考え方は、各自の事情や考えに応じて多様だった。

次に、心の健康の実態の把握と、その関連要因について検討を行った。研究ツールとして、近年のヘルスプロモーションにおける新しい考えである健康生成論とその中核概念の SOC（首尾一貫感覚）スケール、GSES（自己効力感尺度）、GHQ（日本版精神健康調査表）、健康行動として本研究独自に設定した 24 項目の尺度を用いた。各年齢層で、SOC スコアの分布の幅が広いという特徴が見られたことや、最低点と最高点は重度障害者が記録したことから、SOC は障害（病い）の経験で変化すると推察された。特に本研究では、知人や近隣との行き来や生きがいの有無が SOC の形成と発達を左右している、という結果を得た。一方、身体障害のため、日常生活全般に支障をきたし、結果、SOC を低めていることも伺えた。

男女とも、GSES は低い傾向だったことから、身体的、精神的な健康を損ない、適切な対処行動や問題解決行動を行えなくなっている人が多く存在する、ということが示唆された。また、GHQ の結果から、神経症症状について、何らかの問題のある人が多くいることも推察された。

本研究独自に設定した尺度に探索的因子分析をした結果、18 項目 3 因子（メンタルヘルス、身体活動、自己管理）を抽出した。18 項目 3 因子の総得点と SOC スコアには、正の相関があった。各因子の平均値を独立変数とし、SOC を従属変数とする重回帰分析をしたところ、メンタルヘルスが有意に関連していた。

以上の定量的な分析結果を押さえつつ、当事者の障害に関する「語り」の分析して、「当事者に共通したものの見方や考え方、行動様式や意味づけを、帰納的に明らかにすること」を試みた。分析手順は以下の通りである。1) インタビュー記録・観察記録・メモ（データ）の取得、2) データから類語、同義、同文脈単語への分類（Included Terms の形成）、3) Included Terms 間の関係を最も良く表す言葉を抽象化（Cover Term の命名）、4) Cover Term 間の関連性を集約させる（Domain の導出）。ここで本研究では Domain を、当事者の文化的価値観（思考、行為、意思決定、生活様式に意味と秩序と方向性を与える、強力で指示的な力）の構成要素とみなした。5) Domain の位置づけと関係性より、「過疎地に暮らす身体障害者に共通したものの見方・考え方・行動様式・意味づけ」を検討する。これらの手順から、本研究では 15 個の Cover Term を抽出し、その後、最終的に 3 つの Domain を導出した（以下の『』は Domain、「_」は Cover Term である。）

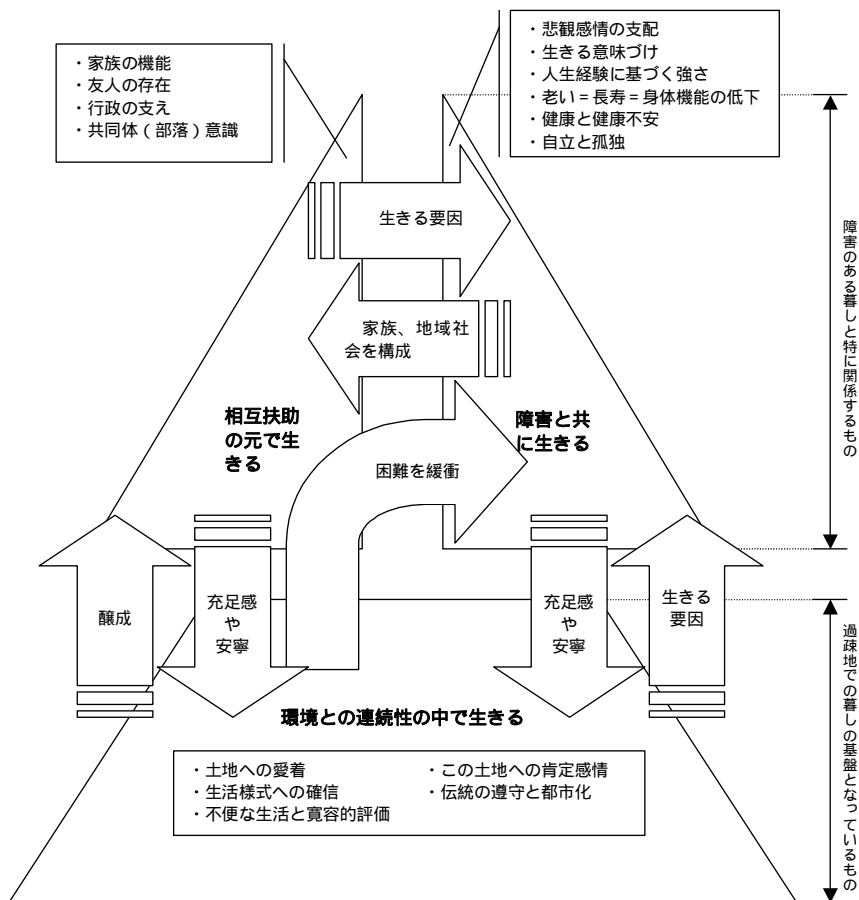
『環境との連続性の中で生きる』: 当事者の多くは、「土地への愛着」を持っている様子だった。過疎を、“疎”であり過ぎる”という意味での過疎と意識していないと思われ（「この土地への肯定感情」）、各々が自分の生活様式を築き、確信を持って生きていると考えられた（「生活様式への確信」）。そして、生活上の不便さを感じながらも許し（「不便な生活と寛容的評価」）、古き良き伝統の中に新しいものを取り入れながら（「伝統の遵守と都市化」）、これからも暮し続けることを望んでいる様子だった。そうした姿からは、環境と自己との一体性を見て取ることができ、

環境との連続性の中で生きる、とまとめた。

『障害と共に生きる』：当事者は、障害を個人史における主題へと創り変えて研究者の前に現れた。自分の障害の現状を正しく認識し、冷静に対処をし、それぞれに「生きる意味づけ」や「人生経験に基づく強さ」を拠り所として生き抜いている様子だった。そして、時には「悲観感情の支配」や「健康と健康不安」、そして「自立と孤独」の狭間で悩んでいるとも推察された。また、高齢者や高齢期に差し加かろうとしている人からは、年齢を重ねれば身体機能の低下は必然的に伴う（「老い=長寿=身体機能の低下」）と、冷静に障害と向き合い、老いを自分の完成体として受け入れている様子も伺えた。こうした姿を、障害と共に生きる、とまとめた。

『相互扶助の元で生きる』：当事者の暮らしの様子を観察すると、「家族の機能」や「友人の存在」の支えがあり、社会関係性の成熟した姿としての「共同体(部落)意識」が、有効に機能している様子だった。そして住民は、「行政の支え」に感謝と失望や更なる期待をしながら暮していた。障害者や高齢者が、個々の事情に応じて自立している姿と共に、そうした自立が、家族や周囲の社会との共生に裏づけられたものであることが理解された。こうした姿を、相互扶助の元で生きる、とまとめた。

続けて、Domain の位置づけと関係性を分析した。まず、位置づけを検討した結果、『環境との連続性の中で生きる』は、障害の有無に関係なく過疎地に暮す住民の基盤になっていると判断され、その上に、障害のある暮らしと特に関係するものとして『障害と共に生きる』と『相互扶助の元で生きる』が存在すること考えられた。次に、Domain 同士の関係性を検討した。結果、過疎地の住民は、環境との連続性の中で生きる過程において、相互扶助機能を醸成させていること。そのことは、住民の暮らしに充足感や安寧をもたらしていること。障害当事者は、環境との連続性の中、そして、相互扶助の元で生きる過程で、様々な形で生きる要因を獲得していること。障害当事者が生きることはまた、家族、地域社会を構成することでもあること。それ（ から の作用）は結果として、暮らしに充足感と安寧をもたらしていること。環境との連続性の中で生きる過程で醸成された相互扶助機能は、障害に伴う様々な困難を緩衝しており、当事者の暮らしを少しでも安寧なものに導いている、と考えられた。結果、当事者に共通したものの見方や考え方、行動様式や意味づけとして、下図が描けた（上記 から は、図中の から に対応）。特に、「相互扶助の元で生きる」という価値観は、当事者が前向きに生きる要因になると同時に、生きる上での困難を緩衝する等、障害のある暮らしをする上で有効な助けとして機能していると考えられた。



注 矢印内の単語やフレーズは、関係性を端的にいい表したものである。

→ は、影響を与えていることを示す。

↪ は、間接的に影響を与えていることを示す。

図 過疎地に暮らす身体障害者に共通したものの見方・考え方・行動様式・意味づけ

（説明）過疎地に暮らす人間の基盤を形成している価値観として、「環境との連続性の中で生きる」がある。これを土台に、障害のある暮らしと特に関係する価値観として、「障害と共に生きる」と「相互扶助の元で生きる」がある。これら価値観は、互いに関連し合っている。

【限界】協力者が寡少で高齢者や中途障害者が多いこと、肢体不自由と内部障害者が多いこと、横断研究であること、面接調査においては初対面の人が相手でも時間も短いこと、等が問題点として挙げられる。また、役場を通じて研究協力者を募ったこと、調査用紙へ記入する際に研究者が同席した場合があること、代理人回答を認めたことも、客観性の担保という点で問題となる。研究結果を安易に一般化する事は出来ない。

【結語】今回の調査では、当事者は、居住地を暮らしやすい場所と考え、健康に配慮し、事情に応じて社会参加をしているという示唆が得られた。心の健康支援が求められると考えられたが、相互扶助を拠り所に、日々の暮らしや障害に対応している事が理解できた。この相互扶助機能のしなやかさは、過疎地の特性であると思われる。